

昭和五十四年三月、わたくしど

もは、特任教授国崎望久太郎先生

をその任期満了に従い、本学から

お送り申し上げた。これに先立っ

て、すでに昭和五十三年三月には、

和田繁二郎先生をお送りしていた。

そして、昭和五十五年十一月二十

五日、鷹津義彦教授を突然に幽明

の地に奪

われた。

また今春

は、本学

に二十八

年間在職された森本修教授を奈良

教育大へお届けした。私事にわた

って恐縮だが、本学に赴任してま

る十一年、かつての専任教員六名

のうちの四名をたちまちに目前で

お送りしたことになる。寂しいな

どという言葉では言い得ぬ、複雑

な想いが卒然と湧き出るのであ

る。

しかし、昭和五十一年四月には

伴利昭先生、昭和五十三年四月に

は秋山公男先生という、新進気鋭

の学究を迎えることができた。ま

た昭和五十五年四月には、神話学

者として著名な松前健先生のご赴

任を得た。そして、今春は本学の

卒業生と

して頼り

になる芦

谷信和先

生のご来

日本文学専攻の再生を期す

福田 晃

学を願った。ようやくにして新し

い道に曙光のさし込むを感じるの

である。

およそそれぞれの大学、専攻(教

室)には、個人を超えた学流・学

統のあることは否めまい。したが

って本学の日本文学専攻には、そ

れなりの学風は存している。しか

し、一方では、それぞれの教授の

個性が堅く重んじられてもきた。

立命館大学の学風を慕い、先輩教

授の学問を燈としながら、息吹き

の新しい学問を生んでゆきたいと

しきりに願うのである。

